
異世界日記（仮）

雨流 光希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界日記（仮）

【Nコード】

N8233Z

【作者名】

雨流 光希

【あらすじ】

俺こと、一雙翔太^{いちそうしょうた}は現実に絶望していた。大学受験を間近に控え、受験勉強を必死に頑張っていた俺へ届いた悲報。

両親が事故にあい他界したと。

だが、悲劇はそこで終わらなかった。

両親の遺産目的に群がった善人ヅラした親戚達。

法律の事など詳しく知らない俺は、親戚達の口車に乗せられ、住む

家さえ奪われる。

心身共に弱っていた。

そんな俺の前に、自称神の一人の女が現れる。

女からの誘いはこの世界に絶望した俺に断る理由は見当たらなかった。

更新できるかぎり一日一ページに変更します。

底辺からの逃亡

夜の闇に包まれた街だが、まだまだ眠りにつくには早いと言わんばかりに街には光が溢れていた。

街灯、車、コンビニ、看板。そして、クリスタスイルミネーション。光源となる物に不自由はしない。また人が途切れも無く歩いている。普段なら会社帰りの人が半数以上だが、今日はいつもとは違った。

今日はクリスマス。イブに会えなかった恋人達、クリスマスを祝う親子連れ。街全体が浮かれ、街ゆく人は、大多数が幸せそうに笑っている。

そんな中、肩を落とし力無く歩く少年、いちそうしゅつた一雙翔太も去年まではその輪の中にいた。

毎年行われていた家族三人によるクリスマスパーティー。パーティーと言ってもクリスマスツリーを飾り、母親の作った料理を食べるささやかな物だった。

だが、今年からは永遠にそのパーティーが開かれる事は無い。

一週間前の事故から、彼のこの世界での人生の歯車は原型をとどめない程、壊れてしまった。

両親の死の悲しみに浸っていると、親戚が押しかけ、いろいろな書類にサインをさせられた。

そして今日、サインをした書類を持った弁護士にこう言われた。

「この家はもう貴方の物ではありません。今すぐに出て行ってください」

翔太は理解した。嵌められたと。

嵌められたと気付きはしたが、即時退去させられる事には疑問を持たない。両親を失い、親戚の裏切りに会い、思考能力が極端に低下していたからだ。

力無く歩き続け、翔太は街の雰囲気から逃れるように、市民公園の中に入る。

市民の憩いの場として作られ、ジョギングコースや、大きな滑り台のついた高さ20m程のロケット型の遊具。夏にプールとして使用されている場所は、今は蓋をされテニスコートになっている。

朝にはジョギングをする人や、犬の散歩をする人で賑わい、昼は子供たちの声が途切れなく聞こえ、夜にはカップルなどが話す場として利用する人気の公園だったが今日ばかりは人影が見当たらない。カップルに人気の公園でも今夜ばかりはクリスマスイルミネーションに軍配が上がった。

「はー」

街の光の届かない公園の奥の方まで歩いてくると、翔太はベンチに腰を下ろした。ベンチはとても冷たかったが今の翔太にとっては些細な問題だった。

今まで甘やかされていたとまでは行かないが、普通の生活を送っていた翔太には、これからどう生きていけば良いのかあてがない。厳密に言うところの世界で生きて行くのが嫌になっていた。

今の翔太を見た者は、「何を甘えた事を考えているんだ？世界にはお前より不幸な境遇の奴がいるんだ」と翔太を叱るかも知れない。

当たり前のように送っていた生活が、急に壊れる者の気持ちがわかる者なんて滅多に居ないだろう。

「ね。君」

不意に女性に声を掛けられる。翔太は顔を少し上げるが、自分に声を掛けてくる者は居ないと直ぐに視線を下に戻す。

「無視しないの」

少しいじけた様な女の声がし、首に何か暖かい物を置かれた。翔太は手にとって見ると缶コーヒーだった。

視線を缶コーヒーを置いた女に向ける。身長160センチ程で、メリハリのある身体つきに、巨乳ではないが、整った胸元を強調するかの様な改造巫女服。下はひざ上5センチのミニスカートを履いた、赤い髪を腰まで伸ばしたロングヘアの美女がそこにいた。

見た目は整っているが、服装により街にいると激しく浮くであろう。美貌と服装により周囲から集める視線は普通の美女に比べたら、段違いに多いだろう。

「不幸な顔をした君に神様からのクリスマスプレゼント」

女は笑みを浮かべている。

「どーも」

素っ気ない返事を返し受け取った。

「ね。君、絶望してるでしょ？」

「なんでそう思う？」

いきなり表れ、心の中を読まれたとしか思えない女の言葉に冷たい声で質問を返す。

「神だから。私の質問にも答えて、この世界に絶望してるんでしょ？」

笑みを崩さないで言う女。笑みを浮かべているが、翔太の瞳に映る女は冗談を言う様な女には見えなかった。親戚に騙される様な自分に見る目があるかは疑問だが、神だといわれ思わず信じてしまう程の不思議なオーラがある。

「絶望してたら、なにかあるの？」

「他の世界に連れて行ってあげるわ」

「それもいいかもな」

翔太は自称神の誘いにあっさり乗った。何もかもを無くした翔太には、この世界に未練は無い。翔太の返答に女は頷き、トランプ大のカードを差し出してくる。カードを受け取り見て見るも何も書かれていない。

「ちょっと指借りるよ」

右手をカードの上に置かれる。その瞬間、人差し指に痛みが走り、赤黒い血が一滴カードに付いた。だが、指には傷一つついていない。

「貴方の情報入れたわ。向こうに行ったら身体の中に入って貴方のステータスを勝手に記してくれるし、身分証明書がわりにもなるから、見たいときはステータスって言えば出るわ。じゃ、行つてらっしゃい」

ベンチに座っていた翔太を立ち上がらせ、女は力一杯その背中を押す。

すると、翔太の目の前の空間がガラスの様に割れ出来上がった穴の中に翔太は吸い込まれていく。

「なー、今から行く世界は楽しいか？」

「比べられないぐらい楽しいわ」

「そっか」

苦笑を浮かべ、翔太は完全に吸い込まれた。

「頑張ればね」

何かを期待する様に言った女の言葉は、翔太の耳には届かなかった。

暗闇の中で（前書き）

修正済み。

暗闇の中で

押し込まれるという表現がぴったりの方法で入った空間の割れ目。その中では見渡す限り闇だった。全身が入るとともに、割れ目から見えていた向こうの世界が消える。公園以上の静寂。ここを表現するのに適切な言葉は、漆黒だろう。光源のない暗闇の中に翔太はいた。

「今の俺の心の中が見れたらこんな色なのかな」

自虐的になりそんな言葉を口にしても、当然の様に誰からも答えは返ってこない。漆黒によち視界は利かないが、誰も居ない事は用意に想像がつく。もし誰か、もしくは何かがここで生きているのなら、何も音がしないのは不自然だろう。ここには自分しかない事を確認する為のつぶやきでもあった。反応は無く。やはり自分しかないらしい。

「ははっ」

乾いた笑いが自然と口からこぼれた。血のつながった者に騙され、今度は自称神にも騙されたのか。もしこの空間に死ぬまで閉じ込められるのだとしたら、間違いなく寿命を全うする前に、自害するだろう。例え自害をしなくても、狂うことは目に見えている。

「なにかおかしい事があったのか？」

まだ入ったばかりなのに狂ってきた様だ。幻聴が聞こえる。優しい声が聞こえた。聞こえてきた声は低い。性別はたぶん男だろう。翔太が知っている誰の声にも当てはまらない。

「聞こえているのか？」

優しい声は心配げな声に変わっている。辺りを見回すが誰もいない。やはり幻聴のようだ。俺はこんなにも優しさに飢えているのかと悲しくなる。

「ついに幻聴が聞こえてきたか」

「幻聴ではないぞ。ゆえあって姿はみせられぬがの。遅くなつてすまんの。水先案内人のゲーテじゃ。さすがにこの空間で人を探すのは苦勞する。わしも歳をとったものだ」

悲しさを誤魔化す為に出した声に、優しい声の主は謝罪の言葉をのべ、自分が案内人だと話す。依然、翔太の中では幻聴という認識は変わらなかった。せいぜい只の幻聴から、自分に優しく話かけてくる幻聴という認識に変わる程度。

騙され絶望し異世界に行くことと決意したため、軽い人間不信に陥っている。自称神の誘いに乗ったのも、何もせず、絶望だけしていても仕方がない、抜け出せるなら、悪魔の誘いにでも自称神の誘いでもいいからのってやるという投げやりな考えをしていたからだった。

「聞こえているのなら大丈夫そうかの。幻聴じゃないと言ってもすぐには信じられないじゃろつて、話す事を頭の片隅にでも置いて置いて貰えればそれでいい。さて、現在そなたが向かっているのは、一言でいえばファンタジー世界というもののだ。魔物が存在し、ダンジョンがある。また魔法も存在する。いつてしまえば、なんでもありの世界じゃて、成り上がるのも惨めに暮らすのも自分次第。ある程度人生のレールが決まっているそなたの世界とは違う。命をかける覚悟はあるかの？」

まだ幻聴だという認識だが、優しい声に問いかけられ、俺は迷わず答えた。この問いにはきちんと答えなければいけないと感じたから。

「人生を謳歌できるなら」

「・・・それならいいんじゃない。そろそろ着くぞい。わしからひとつ。贈り物をしよう」

優しい声は少しの沈黙のあと答えた。何かを迷っているようにも聞こえる。贈り物？姿も見せないのにどうやって？次は幻覚でも見え始めるのか？

翔太が疑問に思っていると、答えはすぐに形を伴って現れた。一切の光のない暗闇から、小さな光の玉が一つ現れる。大きなビー玉ぐらいの大きさの光は、翔太の胸にくっついたと思うと、吸い込まれていく。

ここでやっと翔太は幻聴でも幻覚でもないことに気づいた。なぜなら光の玉が入った胸は暖かい。そして何故かはわからないが、声の主が微笑んでいるように思える。それと共に頑張れと激励されているようにも感じた。

翔太がお礼の言葉を口にしようとする、暗闇が裂け、またその裂け目に吸い込まれはじめる。どうやらこの暗闇が女の言っていた世界ではなく、通路のようなところだったらしい。

「そなたの行く先に幸福がある事を願う」

「ありがとう！」

優しい声の主に届いたのか翔太にはわからないが、裂け目が閉じる寸前に大声で礼を述べた。翔太がいなくなった空間には再び静寂に包まれる。

「わしにできるのはこれぐらいか後はそなた次第だ」

翔太の境遇を女から聞いていて知っている声の主は優しい声音でつぶやいた。答えるものは誰も居ない。

乱入者（前書き）

変なところがあったらご指摘お願いします。

乱入者

お父さんが右手に剣を持ち、二匹の全身緑の魔物と対峙している。周りには青い体液を身体から撒き散らした同じ魔物の死骸が四つ転がっている。

お父さんと比べると、身長は低く短い手足。もうすぐ十歳となる私とさほど変わらない体軀から繰り出される殺意を伴う攻撃は、お父さんに無数の傷をつけ、確実に体力を奪い続けている。お父さんの動きは疲労により少しづつだが確実に鈍っていつているのが私にさえわかった。

六匹で私達を襲撃してきたゴブリンと呼ばれる魔物は、お父さんにより二匹にまで減っていた。だがやられたゴブリン達もただではやられず、大小無数の傷をお父さんに作った。普段通り馬車に乗っていたら、無傷で振り切れる相手だった。

私が道端に咲いている花に心奪われ、馬車を停めて貰わなければ、お父さんは傷を負わずにすんだ。ましてやゴブリンになんて襲われなかっただろう。

後悔の念が胸をしめつける。

花を見つけないければ。

馬車を停めてと頼まなければ。

買い出しに付いていくと言わなかったら。

自分を責めてもゴブリン達が消えない事はわかっていても、自分を責める事しか出来なかった。街から遠く離れている為、助けを呼ぶ事もできない。馬車の後ろに隠れる事しかできない無力な私。悔しくて、悲しくて、何もできない自分の無力さに涙を流す。

お父さんとゴブリン達に動きがあった。二匹のゴブリンが、ゆつくりと距離を詰め始める。お父さんの顔に緊張がはしる。たぶん立っているのもきついのだと思う。

神様。もうわがままは言いません。これからはずっと良い子にすると誓います。ですからどうかお父さんを助けてください。

涙ながらに私は祈った。見晴らしがいいとは言えないが、近くに誰もいない事がわかるぐらいには視界が開けているため、誰かが助けにくる希望を容易に打ち砕かれた私には無駄だとわかっていても、神様をお願いする。目を瞑り必死に祈った。

「いつてー」

「グギヤー」

目を閉じていた私に、お父さんより高い男の人の声とゴブリンの悲鳴が耳に届く。急いで目を開けた私は、自分の目を疑った。疑わずにはいられない光景が映ったからだ。お父さんもゴブリンも目の前の光景に固まっている。

目の前の状況から考えるに、男の人が落ちてきて、ゴブリンにお尻で全体重をのせた一撃をプレゼントした様だった。周りには私の隠れる馬車しかないのに。どこから？

お尻の下に引かれたゴブリンは打ちどころが悪かったのか、ピクリとも動かない。

「お父さん!」

疑問は頭の隅においやり、私は急いで呼びかける。

私の声で硬直の解けたお父さんはゴブリンに駆け寄り、剣を振り下ろす。ゴブリンは青い体液を撒き散らし倒れた。

「お父さん。ごめんね」

馬車の影から駆け出し、勢いよく私はお父さんに抱きついた。服は所々破れ、血が滲んでいる。涙を流し抱きつく私の頭をお父さんが優しく撫でてくれる。

「過ぎた事は気にするな。フローラが無事ならそれでいい」

お父さんの言葉で、私の目からは更に涙が溢れた。

「まだ気を抜くのは早い。やつが何者かわからないからな」

お父さんが耳元で言った。お父さんの右手にはまだ剣が鞘に収められずに、握られており緊張しているのが伝わってくる。私はお父さんに抱きつくのをやめ、立ちあがる途中の彼に視線を向けた。

「なんだこいつ!？」

立ち上がりお尻の下にいたゴブリンを見てそんな事を口にした。気づくの遅いよ。

私は口には出さず、男の人を観察した。

綺麗な黒い髪をした男の人中性的な顔立ちをしている。髪を伸ばしたら、女の人にも見えそうだ。お父さんより少し背は低く、コート

を羽織り、ズボンを履いている。服装は普通だが、見たことない生地で出来ている。

立ち上がった男の人は迷う様な素ぶりを見せた後、視線を向けている私たちの方に歩いて来る。

お父さんが右手に力をいれたのがわかる。何かあったら斬るつもりなのだろう。男の人がどうしても悪い人に見えず、武器も持っていない様に思えた。私はお父さんの右手を両手で掴む。私の意図を察したのかお父さんは剣を鞘に収めてくれた。

目の前まできた男の人は、着ていたコートを脱ぎ、中に着ていた服の袖を破き始める。予想外の行動に私達は戸惑った。お父さんも何をしてるんだこいつは？と彼のやる事を見ている。

「止血するんで、傷を見せてください」

そんな私達を見て、男の人はそう言った。

応急処置（前書き）

文才欲しい・・・

応急処置

自分が軽い人間不振に陥っている事など忘れ、翔太は血を流している男の状態を確認するため近づく。茶色い髪をした男と少女。瞳の色は二人共緑色だった。見た様子だと親子だろう。親を失う事を経験した翔太には、血まみれの親子を見て何もせずに立ち去るという選択肢は浮かばなかった。

「座ってください」

「ああ」

男は戸惑っている様だが、素直に座る。

翔太は座らせた男の身体を確認しようとするが、血で汚れているため傷口の確認がしにくい。翔太は破った袖で血を拭き取り男の傷を確認する。

左腕の傷からは少量ずつ出血が続いているが、他の傷は浅く出血は止まっているようだ。所々に出来た痣が痛々しい。

反対側の袖を破り、左腕の傷に圧迫止血を施す。医学に明るくはないが、命に関わるような傷には見えない。

だが所詮は素人判断。命に別状がないとは言いきれない。

「すまない」

されるがままにされていた男が申し訳なさそうな表情を浮かべる。意識はハッキリしているようだが、早く医者に見せた方がいいのは

間違いない。

「気にしないで下さい。ここから近い街にはどの位で着けますか？」

「馬車でなら、向こうの方に半刻ほどだ。だが何故だ？」

「貴方を医者に見せる為にですよ」

「いや、それには及ばない。少し休めばよくなるさ」

そう言い断る男だが、傷は休んでいても直ぐには塞がらない。休んでいる間にも血が流れ続けたら、きっと状態は悪化するだろう。

翔太はこんな状態の男をそのままにする気はさらさらない為、心配そうに二人を見ている女の子を見る。

「早く治療して、この子を安心させてあげてください。それに、もしまたあんなのが襲ってきたら大変です」

「・・・すまない。迷惑をかける」

少しの沈黙のあと男が折れた。

「いえ。じゃあ行きましょう」

翔太は手を差し出す、男がしっかりと握ったのを確認し、男を立ち上がらせ左肩をかす。

立ち上がった男は痛みに顔をしかめた。足や腕は痛がらなかった。もしかすると肋骨が折れているのかも知れない。

反対側には、治療が終わるまで心配そうに男を見ていた女の子が男を支える様に付き添う。

馬に運転手の乗るスペースをつけた大きいリアカーに見える馬車につくと、翔太は男を寝かせるスペースを作ろうと荷台にある皮袋をよせる。本来荷物を運搬するための馬車らしく、人が寝れるように作られていないのが見てわかる。怪我人には辛いだろうが我慢してもらうしかない。せめてなにか敷くものを探すが見当たらない。血で汚れるからと男は嫌がったが、翔太は着ていたコートを脱ぎ敷いた。何も無いよりは多少は楽になるだろう。男は横になると怪我のせいか疲れかはわからないがぐったりしている。

「あの・・・お父さん大丈夫ですよね？」

「大丈夫だから、お父さんについてあげてて」

横になっている男の横に座り、始めて声を出した女の子を安心させようと翔太は微笑み答える。

「うん。わかった。ありがとう」

流していた涙をぬぐい、笑顔でお礼の言葉を口にする女の子。

さて、どうしよう。

当然だが、馬車の操縦などした事がない。東京に住んでいた翔太は馬すら初めて見た。よくよく見ると馬に似た外見をしているが東部には短い角が二本生えており、若干馬とは外見がことなっているが、そこまで頭が回らなかったので、翔太の中では馬という認識である。

とりあえず、昔テレビで見たのを真似して見ることにする。手綱を軽く振ると馬がゆっくりと歩き出し、馬車が動き出す。アスファル

トで舗装されていない道は当然凸凹^{トコトコ}しており、それによって馬車が揺れたる。十メートルほど進んだところで手綱を手前に引つ張る。すると馬は歩みを止めた。どうやらこの方法でいけるらしい。

揺れがひどそうだけど、なんとかなるかな。

「少し揺れると思いますが、痛みが酷いようなら速度を落としますので言ってください」

男は無言で頷いた。

「お父さんがつらそうだったら教えてくれるかな？」

念の為女の子にも声をかけておく。男は痛みを我慢して言わない可能性もある。

もし骨が折れていたりしたら、悪化するかも知れない。

「はい。わかりました」

女の子の声に頷き、先程と同じぐらいの強さで手綱を振る。最初から強く振ると馬が一息に加速するかもしれないので、徐々に強くしていく。馬が次第に速度を増し走り始める。男の姿を確認するが顔に出るほど痛みは感じていない様子に安心する。逸る（はやる）気持ちを落ち着かせる為に、翔太は手綱を強く握り締める。三人を乗せた馬車はゆっくりだが確実に街に向かっていった。

迷宮都市（前書き）

見切り発車感が…。誤字脱字あったら報告お願いします。

迷宮都市

馬車に乗って四十分ほど進むと、建造物が視界に入る。注意してみると高い壁に囲まれている街のようだ。街の規模は遠目からも広いのが伺えるが、中の建物はほとんど壁の影にはいつてしまっているようだ。

あと十分も馬車に揺られれば着くことができるだろう。幸い道中、魔物に襲われる事はなかった。だが男の容態に気を使い馬車の速度を抑え進んでいたため思ったよりも時間が経過していた。

「あそこでいいんだよな？」

翔太の問いに少女は男から視線を外し前を向いた。

「はい。あそこが私達の街です」

「了解」

街道沿いに進むと大きな門があり。四人の兵士が立っていた。翔太は手綱を引き馬車を止める。すると金髪の背の高い鎧の上からでもマッチョとわかる兵士と、頭に茶色い犬耳の生えた兵士が近寄ってきた。

「これは、ゴッソ・リーデルの馬車だな。なぜ君が乗っている？」

犬耳の兵士が険しい表情を浮かべる。マッチョな兵士は既に抜刀していた。明らかに警戒されている。荷台に乗っている男はゴッソというらしい。

「この馬車の持ち主は怪我をしていて荷台で休んでる。早く医者に見せたいんだ」

「確認させてもらっ」

剣を鞘に収めマツチヨは荷台の方に歩いていく。その時間さえもどかしく感じる。

「このぐらいなら大丈夫だろう。任せろ」

マツチヨは荷台にいくと寝ているゴツソの姿を確認すると、両手を合わせるようにゴツソの身体の上に置く。

「ホレアンさん」

どうやらマツチヨと女の子には認識があるらしい。マツチヨは名前を呼ばれ女の子に笑顔を大丈夫だと伝えるように笑顔を向ける。状況が状況だけに翔太は口には出さなかったが。正直、このマツチヨに笑顔が似合わないと思った。

「わかっただろ？早く医者に見せたいんだ。通らせてくれないか？」

「なんで医者なんだ？医者は病気の時に行くところだろう。ホレアンはああ見えて治療士だ安心しろ」

犬耳の兵士はなにをおかしな事をといった目で翔太を見た後、ああと頷き何かに納得したようにそう話した。

あの外見で治療士^{ヒーラー}かよ。治療士^{ヒーラー}つてあれだろ？なんか不思議な術で身体癒したりするあれだよな？パーティーメンバーに守られる身体的に恵まれないイメージだったんだが。あのマツチヨは見るからに先頭にたって切り込むタイプだろ。魔物に笑いながら突っ込んでいきそうだ。

翔太はそんなことを考えながら、マツチヨの行動を見守る。

「^{かのもの}彼者に癒しの光をヒール」

マツチヨの手が発光し、光がゴッソを包み込む。光はゴッソの傷にあたると傷口とともに消えた。

「もう大丈夫だ」

体育会系スマイルで女の子の頭を撫でるホレアン。

「ありがとうございます。お父さん」

「んん。迷惑をかけた」

お礼をいい女の子がゴッソに抱きつく、ぐったりしていたゴッソは上半身をゆっくりとあげる。その光景に胸が暖かくなる。

「俺は治療しただけだ。礼ならその男にいいな」

ホレアンに言われ、ゴッソは翔太の方を向く。

「君には本当に世話になった。よければお礼がしたい」

ゴッソは立とうとするが血が足りないのか、ふらついている。

「無理しないで休んでいてください。このまま家まで送ります」

「フローラすまないが道案内を頼む」

女の子はフローラというらしい。小さく頷くと翔太の横に腰掛ける。

「リーデルさん。傷は治った。だが失った血はすぐには戻らない。しばらくは安静にしておいてくれ。君、馬車を出しても良いぞ」

ゴッソに声をかけた後、ホレアンは翔太に通行の許可を出す。

壁に囲まれている割にチェックは甘いらしい。ゴッソと一緒にいるにしたって始めてきた翔太に何も言わないのは何か事情があるのだろうか？

今は気にしてもしようがないか。

ゴッソを早く休ませるため、疑問を頭の隅においやり、ホレアンの言葉に頷く。

馬車を動かすため、手綱を軽く振り馬をゆっくり歩かせ出す。

「ようこそ迷宮都市オリガントへ」

ホレアンが大きな声が背後から聞こえた。やはり体育会系らしい。そして翔太がここに初めて訪れたことにも気づいていたようだ。ホレアンに手を振ったときに背後にいた犬耳の兵士は苦笑していた。

恩返し

どこが迷宮都市なんだ？

今は、女の子もといフローラの案内に従いながら馬車を進めている。迷宮都市と言われたので迷路の様に道が入り組んでいるのかと思っ
ていたらそうではないらしい。門から続く道は大通りなのだろう。
馬車が二台は並んで通れそうに見える。

大通りから伸びる道の幅も大体が馬車一台通れるぐらいの広さにな
っており、よく整理された街並に見えた。都市というだけあり、沢
山の人が行き交っており、商人や買い物客などの声がひっきりなし
に聞こえ、栄えているのがわかる。

「ここです」

「ああ」

フローラの案内で到着した馬車は大きな看板がついた木造の建物だ
った。

裏に馬車を止めると、フローラが荷車から馬を離す。ゴッソは荷台
から立とうとするがまだ一人で立つのは辛そうに見えた。

「手を貸します」

「助かる」

ゴッソを肩担ぐように支え裏口から建物の中に入る。

「お母さん呼んで来る」

「ああ、頼む」

後から入ってきたフローラが廊下を駆けていった。

「どこか横になれるところがありますか？」

「こっちの奥に寝室がある」

フローラを見届けた後、ゴッソの案内で建物の中を進み、寝室にゴッソを寝かせる。大きなベッドがあり、整理整頓という言葉が似合う綺麗な部屋だった。

「連れてきたよ！」

勢いよく扉を開けたフローラに続き、フローラを大きくした様な女性性が部屋に入ってくる。

「ルアン・リールデルです。話はフローラに聞きました。夫と娘がお世話になりました。もし貴方がいなかったら、この宿屋は潰れていたでしょう。ありがとうございます」

頭をさげ、お礼の言葉を口にする女性。美人に頭を下げてお礼を言われると照れることを翔太は学んだ。

「いえ。当然のことはただけです。でわ、失礼します」

「まちたまえ。君さえよければしばらくここに泊まっていきなさい。この街にきたのは初めてだろう？知らないことは教えよう」

翔太が部屋を出て行こうとすると、ゴッソが引き止める。無一文の翔太にとっては願っても無い申し出だ。

「でも、俺お金持ってなくて。なので遠慮します」

「恩人から金とはらん好きだけいてくれて構わない」

お金の事で嘘をつきたくない翔太は素直に所持金がない事を話すが、ゴッソは引き下がらなかった。

「お兄ちゃん行っちゃうの？」

「お父さんがあそこまで言ったらきつと居てくださるわ」

フローラの問いにルアンは笑顔で答えている。

さすがにここまで言うてくれている人の申し出を無下に断るのは気が引けた。

「わかりました。一いちそつ双翔太しょうたです。しばらくお世話になります」

ゴッソはうんうんと頷き、ルアンは優しい笑みを浮かべ、フローラは見るからに喜んでるのが感じられた。一家の優しい反応に翔太は目頭が熱くなるのを感じる。

「よかったわねフローラ。一階の開いてる部屋に案内してあげて。あと、お父さんの古い服もっていきなさい。終わったらすぐ戻ってお手伝いお願い。」

「うん。わかった！翔太お兄ちゃんこっちだよ」

笑顔のまま歩くフロアに続く。案内された部屋は、入り口からはいつて一番最初にある部屋だった。

大きさは八畳といったところか、一人で使うには広めである。

「いいのかこない部屋つかっちゃって？」

「うん。好きなように使って大丈夫だよ。それと、これ着替えね。じゃあ、夕食までゆっくりしてて。私お手伝いしなきゃいけないから行くね。夕食できたら呼びに来るから」

翔太はいろいろ聞きたいことが合ったが、フロアはそういうとすぐに部屋を出て行ってしまった。手持ち無沙汰になった翔太は用意してもらった服に着替る。着替える最中とあることに気づく、すっかり忘れていたが翔太の服にはゴツソの血が少なからず付いている。兵士に止められるのも当然だ。コートには服以上に血がべっとりとついており、もう着ることはできないだろう。着替えをすませ、ベッドに横になる。

「そつえばまだ見てないな。何が書いてあるんだろう」

不意に、こちらに来る前に改造巫女服の自称神を名のる女に渡されたランプ大のカードの事を思い出すが、なれない馬車の運転で疲れたのか翔太は眠りに落ちていった。

迷宮都市とは

身体を揺さぶられる感覚がする。母さんが起こしに来たのだろうか？

「もう少しだけ寝かせてくれよ」

身体を揺さぶる手を払いのける。

「じゃあ少しだけですよ」

優しい声が頭の上から振ってきた。母親より少し高い声だ。身体を起こす。

まだ覚醒しきっていない頭を軽く左右に振る。

ここは俺の世界じゃない。

母さんはもうどこにも居ない。

目を開けると若い女性がいた。茶色い髪を背中まで伸ばし、赤い瞳をした優しい顔つきの女性。気のせいかも知れないが子供が悪戯を成功させた時の様な表情を浮かべているように見える。

「ルアンさん。すみません。寝ぼけてました」

自分の顔が赤くなっているのがわかる。羞恥で心臓が爆発しそうだ。

「いいのよ。あなたもこの子も疲れてたんでしょう」

笑いを堪えているようにも見える顔を向け、ルアンは翔太の横を指

差した。

どうやら本当に笑いを堪えていたらしい。

何やら暖かい物があつたのには気づいていたが、ルアンの指差すほうに翔太は視線を動かし固まった。詳しくいうと暖かい物の正体を視界に捉えて翔太は固まった。

「起こしに行った子が寝ちやうなんてね」

そこには猫のように丸くなりスースーと寝息をたてるフローラの姿。

「すみません」

急いでベッドから起き、悪い事をしていないのに翔太は謝った。

「いいのよ。フローラ起きなさい」

ルアンは優しくフローラの身体を揺する。

「うーん」

眠そうに目を擦りながら起きるフローラ。髪に綺麗な髪には寝癖が付いており、先程みた時より幼く見えた。ルアンと翔太を交互に見ると、頬を赤く染め、逃げる様に部屋から飛び出して行った。

「あの子があんなに懐くなんて珍しいんですよ?」

「そうなんですか」

「ふふつ。いじめすぎましたね。私達もいきましようか」

ルアンはそう話すと部屋をでていった。フローラと翔太の反応に満足したのだろう。

やっぱり。途中から気づいてましたよ。

肩を少しだけ落とし、翔太はルアンに続き部屋をでる。

「あの、この街ってなんで迷宮都市なんですか？」

「あら？知らないできたの？」

「はい」

「この街はダンジョンに居る魔物のおかげで繁栄してるからね。ダンジョンで繁栄してるところは、みんな迷宮都市よ」

RPGかよ！

「それなりに稼げるみたいよ。ま、死ななければだけどね」

「街を囲う壁はダンジョンから出る魔物を外に出さない為ですか？」

「それは違うわ。ダンジョンの魔物はダンジョンの外に出れないの。出ると消えるわ。あの壁は外の魔物から街を守るものよ。さっ着いたわ。フローラの横に座ってくださいね」

まだからかうつもりなのか、この人は。

ルアンに促され、翔太は小さくため息を吐き、まだ頬を赤く染めて

いるフローラの隣に腰掛けた。

可能性

案内された場所は、宿屋のお客さん様ではなく家族専用のらしく小さなキッチンと四人掛けのテーブルが置いてあった。置いてある物はどれもセンスの良さが伺えた。

ルアンにからかわれながら食事を済まし、今は甘い匂いのするお茶を三人で飲み雑談をしている。食事中に、旦那さんは食べないのか聞いたら、食事は翔太とフローラが寝ている間に済ませたとの事。

「あの、ここでお金を稼ぐなら、やっぱりダンジョンに行くのがいんでしょうか？」

雑談と言っても、いつまでもここに世話になるわけにも行かない。一人で生きていく為の方法を考える材料にする為に聞ける事は聞いて置かなければと考える翔太が質問し、フローラとルアンがそれに答えるという流れがしばらく続いていた。無知な翔太に嫌な顔一つせず丁寧に教えてくれている。

「そうね。あとはギルドの依頼かしら。こっちは壁の外の魔物討伐とか要人警護とかダンジョンとは関係ないお仕事が多いかな。それに戦い方の指導や、魔力測定とかいろいろなさポートもつくから、例え依頼を受けなくても登録しといて損はないわね」

「どっちにしる戦う術は必要なんですネ」

「何をするにしても先立つものは必要よ。私達もこの店を建てるのに苦労したわ。ま、苦労したかいがあったけど」

ルアンは過去を思い出す様に目を瞑り、眠そうにしているフロアの頭を抱き寄せて撫でている。

大切な場所と愛しい人達を想う母の顔をしている。その顔に今は亡き両親の姿が被った。

「戦えるか不安？」

「不安はありますでも」

一度言葉を切る。ここからは少し省いた方がいい気がしたから。

地球でもここでも零なのは変わらない。

だが、地球の零はマイナスに向かう零。ここでの零は努力次第でプラスに行く可能性のある零。

なら、迷わない。手で覆いつくれる程の小さな希望でも、それにかけてみる価値は充分にある。だから、翔太はルアンの目を真っ直ぐ見つめ答える。

「ルアンさんの様に大切だと想えるものを手に入れる為になら、俺は戦います」

「そう。私達と同じね」

「見つけれられるかはまだわかりませんが」

「それは努力しだいよ。それに翔太さんがよければ、この子のお嬢さんになって宿をついでもかまわないわよ？」

話が思わぬ方に転がり、翔太は絶句する。

「ふふ。今は冗談だけど考えておいてね。もしダンジョンやギルドでお金を稼ぐつもりなら、注意してほしいことがひとつあるの。それと戦い方に不安があるならギルドには登録しておいたほうがいいわね。見たところ武器も無いみたいだし、運がよければ忘れ物の武器とか貰えるわ」

「わかりました。ギルドには明日にでも登録しようと思います。注意する事ってなんですか？」

「奴隷を扱うか信頼できる人が出来るまでは過剰に警戒しておいた方がいいわ。魔物との戦いでも、それ以外でもね。悲しい事に世の中には悪いことを考える人間もいるから」

「大丈夫ですよ。わかってますから」

人を警戒すると聞き一瞬だが、顔が硬直したのが自分でもわかった。それを誤魔化すためには話題を変えなければと思うが何も浮かばない。仕方なく翔太は素直に返事をした。

「ならいいけど。ここには本当に好きなだけいていいからね。翔太さんには何かあるみたいだけど、私もフローラも夫も気にしないわだから絶対に無理はしないで」

ルアンは翔太の表情の変化に気づいたようだが深くは聞いてこなかった。

その優しさが翔太にはとてもありがたい。そしてルアンの表情から、会って間もない自分のことを本当に心配してくれているのが伝わり嬉しかった。

「話し込んでしまったわね。今日はこのへんでお開きにしましょう。
お風呂は地下にあるから自由につかってくださいね」

「はい。ありがとうございます」

翔太が答えるとルアンはフローラを揺さぶって起こす。

「行くわよフローラ挨拶して」

「ん。おやすみなさい」

「おやすみ」

「でわ、失礼しますね」

眠い目を擦っているフローラ。

ルアンはその手を引きこの場を後にした。

ルアンとフローラの背を見送った翔太の頭の中にひとつの言葉が引っかかっていた。どうやらこの世界には奴隷がいるらしい。ルアンの口ぶりからすると、当たり前のように話していたため一般常識のようだった。

「奴隷か…」

健全な十八歳男子高校生の頭に、よからぬ妄想が浮かんだのを責める者はここには居なかった。

ギフト（前書き）

修正はいりましたー

ギフト

これからの事に思考を巡らせる。

まず、ギルドにはいつておいた方がいいだろう。戦い方なんてさっぱりだ。多少なりともレクチャーは受けておきたい。それにもともと持っていた荷物はあるが実質身一つでこちらの世界に来ているため中古でも武器は必要だ。

一度ダンジョンの下見もいるだろう。ギルドの仕事を請けるかダンジョンで稼ぐかは決めていない為、急ぐ必要はないがしておいた方が無難だろう。

とりあえずの方針は決まったが、翔太は何か忘れているような気がした。

「そうだ。ステータスカード。すっかり忘れてた」

改造巫女服の自称神が身分証明書がわりに言っていたカードのことを思い出す。身分証明書が必要な世界なのかは今のところ疑問だが、ステータスカードというぐらいだ。今の自分の状態を知るにはうってつけだ。

「ステータス」

淡く黒い光を放ち、白いカードが表れる。名、一雙翔太^{いちそうしょうた}、種族人間、性別男、年齢十八歳、ジョブ冒険者LV1、所持魔法無し、所持スキル、ギフト。簡単に表示されていた。だがその中に気になるものが一つある。

「ギフト？」

確認するように所持スキル欄のギフトに触れる。するとスキル欄に新たな文字が増える。まさかのタッチパネル方式であった。

ギフト『言語理解、物質構築 構築時間LV依存、身体能力強化LV依存、魔法適正あり、詳細確認、幸運』

「ジョブは職業だよな。冒険者ってどつかのRPGかよ。てか言語理解があるってことは、地球とは言語が違うって事か。あと物質構築ってなんだ？」

翔太は疑問を感じ物質構築のところに触る。

物質構築。世界に干渉し自分の望む物を構築できる。ただし構築できるもの、構築してられる時間はジョブLV依存。という説明が現れた。

「どんな能力だよこれ」

試しにナイフを想像してみると刃渡り十センチ程の一本のナイフが出てくるが、十秒ぐらいで消えてします。

「すごいけど短いな。LVのせいかな？」

続いて身体能力強化のところに目を向ける。

身体能力強化。身体能力が強化されるLV依存。

「身体能力強化も今はあまり恩恵ないかもな。魔法適正のところはみなくてもいいか。どうせ魔法は使えないみたいだし」

魔法適正の欄を飛ばし、次は詳細確認に触れてみる。

詳細確認。ステータスカードから詳細を確認する。

「これはまた使いづらい。見ただけで全部わかるとかにしてくれたらわかりやすいのに」

思わず愚痴がこぼれる。携帯小説とかでは見ただけで相手の事がいろいろわかったりするが、どうやらここはそこまで便利では無い様だ。

さらに、幸運にいたっては運がいいとしか説明が書いていなかった。これはスキルと言えるのかさえ謎だ。

「だけど、これって」

ここまで見てから翔太は自分のステータスカードに違和感を感じる。地球では学業はそこそこ、運動神経は平凡だった。そんな翔太にこんな能力が最初から付いているはずが無くギフトの名前が示すとおり。誰かから贈られたものだろう。一つの結論にたどり着く。

「ゲートからか？」

答えはないがあの改造巫女服は、そこまで親切なようには見えなかった。そしてこの世界ではそんな力を与えてくれるような者とは会っていない。

「ありがとう。頑張ってみる」

確認していないため、戦いに役に立つかはまだわからないが、翔太は名前しか知らないゲーテに礼を述べる。聞こえるとは限らないがここは気分の問題だ。

言語理解があるだけでも大いに助かる。親の転勤に巻き込まれて英語もわからないのに英語圏の国に放りこまれる子供の気持ちなんて知りたくないし、この言葉を習得するにしても意味がわからなければ習得なんて不可能だ。間違いなく詰んでいたであろう。

RPGかよとツツコンでいた翔太だったが、実際、内心ではどきどきしていた。魔物、ダンジョン、ギルド、魔法。この世界に心躍っているのは確かだ。自分を磨けばそれだけ結果がでる。言葉が通じなければ何も堪能できない。

それに奴隷…。

自分の妄想でベッドの上で悶える翔太。どっからどう見ても変人にしか見えなかった。

「落ち着け俺」

両手で頬を叩き妄想を頭から追い出す。

「今は、この世界での地盤を作ることが最優先だ。手当てをしただけで、いつまでも甘えるわけにはいかないしな。とりあえず寝ておくか。ってこれどうやってしまうんだよ」

仕舞いたいと思うとカードは右手の中に吸い込まれていく。翔太はカードが吸い込まれるのを見届け、床についた。

そっだ。ギルドに行こう。

窓から差し込む日の光によって目が覚める。辺りを手で探ってみるも今日は布団しか手に触れない。

「ふあー」

大きなあくびをして体を伸ばし、上半身をひねると腰がコキコキとなる。

コンコンッ。

翔太が起きるのを待っていたんじゃないかというタイミングでノックの音が部屋に響いた。

「どうぞ」

ノックの音に返事を返すと、小さな影が部屋に入ってくる。

「おはよう…ございます」

昨日一緒に寝てしまったのを気にしているのか、少し恥らった様子で入ってくるフローラ。今日はひらひらしたフリルの付いた水色のワンピースを着ている。その姿はとても可愛らしかった。

「おはよう。どうしたの？」

「お母さんが朝ごはんだから、呼んで来てって」

「ありがとう」

「ううん。いい」

翔太が礼の言葉を口にする、フローラはふるふると小さく頭を横に振る。翔太は簡単に身支度を整える。身支度といっても寝癖を手櫛で整えるぐらいだがしないよりはいいだろう。それが済むとフローラと共に部屋をでた。

朝食は卵とハムの入ったサンドイッチだった。ありがたくいただく。予想通りフローラとの事でルアンにからかわれたが、翔太には耐性ができそれ程動じずに聞き流した。だが今日も隣に座らされたフローラは、ルアンの言葉に顔を赤くし俯いてサンドイッチを食べていた。

「今日はギルドに行ってみようと思います」

「そう。昨日言ったこと忘れちゃ駄目よ？」

「はい」

「ならいいわ。後はやるから、がんばってらっしゃい」

朝食の片付けを手伝いしつつ、今日の予定を話す。

返ってきたルアンの言葉に頷くと、ルアンは片づけを引き受け笑顔で見送ってくれた。

ギルドは街の大通りを奥に行けばすぐにわかるとの事だった。さらにダンジョンはギルドから近いので、帰りにダンジョンの場所の確認もしようと決め翔太は大通りにでる。商売をしている店と準備中だと思われる店が半々だというのに、人

通りは多かった。

見るからに冒険者だと判断できる大剣を腰にさした男や、弓を担いだ尖がり耳の女。あれはたぶんエルフだろう。思い思いの武器をもった冒険者達が目に付く。ぐねぐねと波打つような形の杖を持った背の小さい、もこもこ耳の少女なども居たりする。

大通りに陣取り、通行人を見ているだけでも一日潰せるんじゃないかと思うほど、多くの種族が行き交っていた。

いつまでも立ち止まっている訳にもいけないので、歩を街の奥へと進めていく。

十五分歩くと街並みが変わって行く。

鈍く太陽光を反射する鉄で出来た大きな鎧、刃に返しが付いた片手用の剣、先端に赤い石の付いた杖など武器や防具を売る店が増えてきた。

目に映る様々な武器防具に興味を惹かれつつも更に奥へと進むと上部に剣と杖を交差させた緑色の看板が付いている大きな建物が見えるてくる。

武具を身に纏^{まと}わせたもの達が入りしているの、あそこがギルドで間違いないだろう。

ギルドに近づくにつれ、翔太は周りの視線を集めていく。だが、翔太は気づかない振りをして歩いていく。武具を纏^{まと}う物達の中に、一人だけ普段着でいる翔太は完璧に浮いていた。周りの視線は気にせず歩を進める。幸いにも声をかけてくるものは居なかった。

ギルドの扉を開く。ちょうど出るところだったのか先ほど街で見かけたぐねぐねした杖を持った少女が目の前にいた。一瞬驚いたよう

だが、すぐに元の表情に戻る。

扉を開けようとしたところに、人が来るとびっくりするのは異世界でも一緒だった。

「すみません」

驚かせた事に謝罪し、扉を開けたまま少女に道を譲る。

「いえいえ。いいんですよー。よくある事ですから気にしないでください。ありがとうございます」

少女は上品な笑みを浮かべ、翔太が開けたままの扉から出て行った。少女を見送り扉を閉め中を見渡す。

右側の壁には大量のメモ用紙が貼り付けられており、数人の武装した者が張り紙を見ている。入り口側に近づくにつれ、掲示板を見ている人数が減っている。

左側には椅子やテーブルが複数用意されており、何人かが雑談に興じている。

また奥には四つのカウンターが設置されておりギルドの職員と思われる人たちが、カウンターに越しに冒険者の対応をしている姿が見える。

入り口側から見て一番左に恰幅のいい人間のおばさん。二番目にはとんがり耳の若い男、三番目には初老の男性。四番目には青い髪をポニーテールにし、頭にデディーベアみたいな耳を生やした女性。

恰幅のいいおばさんのカウンターは開いていたが、翔太は椅子に腰

かけテディーベア耳の女性のカウンターが開くのを待った。

どうせ対応されるなら綺麗な人がいいと思うのは男として当然だと思っただけだ。

テディーベア耳の女性は、水色の石が先端に付けられただけの簡素な杖を背負っている男の対応をしている。

翔太はその背中に早く終われ早く終われと念を飛ばす。確実に効果はないと思われたが念を飛ばし続けること五分弱ほどで男はカウンターから離れていく。翔太はチャンスを逃すまいと急いでそのカウンターに向かっていった。

実地訓練（前書き）

修正入りました。

実地訓練

黒い体毛に包まれた右腕が翔太に真っ直ぐ向かって来る。異常に発達した筋肉から繰り出される拳。さらに手の甲からは十センチ程の爪が三本飛び出ており、当たり前どころが悪ければ即、死に繋がるだろう。

スピードは早いが見切れない早さではない。左に一步移動し、カウンター狙いで左手に持つ刃渡り三十センチ程の剣で、爪を上から力任せに叩きつける。

ダンジョン三階層で初心者キラーと呼ばれるダークパンサー。漆黒の体毛に包まれ、二足歩行をする見た目は狼男に似ている。厄介な事に火魔法にも耐性があるそうだ。

魔物に感情があるかは不明だが、翔太の反撃により、ダークパンサーは驚愕ともとれる表情を浮かべ、体制を崩され前のめりに倒れそうになる。

翔太はその隙を見逃さず、右から左に腰を捻^{ひね}り右に持った剣で胴を斬りつける。手に肉を斬る感触がし、真紅の血が飛び散る。その事に一瞬顔をしかめるが、構わず切り裂く。絶命し、丸い水晶のように見える物を残し、ダークパンサーは消える。すると翔太の衣服に付いた血や肉も消えた。

「いい動きだ。だいぶ慣れてきたな。おめえは中々筋がいいじゃないか」

男の声を背中に受けるが、今は答えている余裕はない。後ろを向いて会話する、そんな愚行を犯したら、やつらはその隙を見逃さずに

襲いかかってくるだろう。連携し三体同時に襲いかかって来なかったのは不幸中の幸いだった。

知能はそれ程高くないのかもしれない。それを証明するかのように、二体同時に襲いかかってくるが、連携が拙く、お互いの動きを邪魔し合い、最終的には同士討ちを始め出す始末だ。

消耗したところを見計らい、助走をつけ両手にした剣を内側から外側に横薙ぎし、二匹の首を胴から話す。

「はーはーはー」

三時間もダンジョン内で戦っている。疲労の為か、翔太の息は中々整わない。

「おつかれー。おっ、爪があるじゃねーか」

ダークパンサーの落とした魔石と残った部位を拾い、男は翔太に近づいて来る。

「はーはー、スパルタ過ぎです。ドランさん。手加減って言葉知ってます?」

冷やかな視線を向け、歩いて来る男に話かこる。百八十センチを超える筋骨流々の短髪、黒髪。まさにおやじという言葉が似合う外見をしたドラン・カルニールは満面の笑みで口を開いた。

「まー、言葉も意味もしってるが、する気はねー。なんたって娘からご指名だからな。やわな冒険者にするわけにはいかん」

翔太は頭を抱える。どうやら途中で選択肢を選ぶ時にミスをしたようだ。

四時間前自分に教えてやりたい。

カウンターに居るティベア耳の女性を選ぶと、もれなく親父がついてくると。

彼女の名はテスト・カルニール。ベアー族の母と人族父から生まれたハーフだった。

ギルドの登録、説明、魔力測定に丁寧に対応してくれた。

だが、翔太が戦闘指南も希望するというと、申し訳なさそうにこう言ったのだ。

「父が指導員をしているのですが、皆さん途中で逃げてしまつんです。どういう指導をされたのか聞いても口を閉ざし誰も教えて下さらなくて。もしよければ父の指導を受けて私に内容を話してくださいませんか？引き受けてくださるなら、細やかですが報酬もお出します」

「わかりました。力になれるかはわかりませんが」

正直断りたかったが、質問ばかりの翔太に対し、嫌な顔一つせず、丁寧に説明してくれた。さらには、上目遣いで本当に困っている様に言ってきたので、翔太は無下に断る事も出来ず、引き受けてしまった。

テストがドランに連絡を入れると、すぐにこのおっさんが現れる。だが翔太を見た後すぐに消え、二振りの剣を持ち再度登場。翔太を担ぐとそのままダンジョンに突入した。

余談だが、ドランを見ての第一印象は似てなさすぎだったので、そ

の事をドランに話してみたところ、テストは母親にだと笑って話していた。

似なくてよかったなテストさん。

相当な無茶苦茶っぷりなドランだが、ドランの指導は的確で、三時間で翔太に、初心者キラーと呼ばれる魔物を倒せる程まで仕込んだ腕は、わかるものが知れば驚異的なのだが、他の冒険者を知らない翔太にはドランの腕の良さはまったく伝わらなかった。

翔太にとっては、美人な娘のいるスパルタじじいという認識である。

「教える事は教えた。あとはお前の頑張り次第だ。ギルドに戻るぞ」

ドランに声をかけられ思考を中断する。
ドランはすでにスタスタと歩いていた。

「了解」

テストと話す事を考えながら、翔太はドラン後に続いて歩き出した。

初めての魔法

地下にあるとは思えない程明るい通路を、ドランの後に続き翔太は歩く。地下なのにどうして？とダンジョンに入る際、ドランに聞いてみたところ、ダンジョンだから当たり前だと返されたので、考えるのはやめた。

前を歩くドランは何故か上機嫌で鼻歌を口ずさんでいる。

「ドランさん」

「なんだー？坊主」

「なんで俺の武器は剣二つなんですか？」

「なんとなくだ。お前に盾は似合わないと思ったんだ。気に食わないなら持ち替えてもいいぞ」

「適当かよ！」

上機嫌なまま答える balan に翔太は敬語も忘れてツツコンだ。自分が命を預けていた武器が適当に選ばれていた事に少なからずショックを受ける。

「おっ」

「はー。どうしたんですか？って、ちょっと！」

翔太はため息混じりに質問したが、ドランは答えず走り出した。翔

太は帰り道を覚えていない為、はぐれない様ドランの背を追う。そこで違和感に気づく。

俺、こんな足早かったか？

地球で走った頃より、風を切る感覚が増大している様に感じた。

もしかすると、LV上がって身体能力が強化されているのかもしれないなら。

後でステータス確認してみるか。

そんな事を考え走っていると、不意に前を走るドランが止まる。どうやら目的地に着いたらしい。

「なかなか足も早えじゃねーか。株があがったぜ。さすがは俺の弟子。ま、俺の教育の賜物たまものだな。ほら見てみるよ」

「そりゃどーも」

適当に流す。まだ半日程しか過ごしていないのに、いつのまにか弟子にされていた。

ひとまず気にしない事にし、促された方に視線をやる。一辺が十五メートル四方の大部屋で、戦闘が繰り広げられていた。

高貴な身分ですと自己アピールの激しい格好をした二十歳ぐらいの金髪の男。持っている金色の杖には宝石が散りばめられており、先端には薄緑の石がはめ込まれている。見に纏まとう赤い高級そうなマントには何か動物の絵が刺繡ししゅうされていた。確かあれはグリフォンだったと思う。

そして、それを護衛する様に、三人の美女が武器を手に持ち周りを

囲んでいる。

対峙している魔物はビッグラットが四体。

大きさは豚程だが、頭部には鋭い角が生えており、頭突きをしにくる。

だがネズミ本来の素早さは無いため回避は楽。ドロップ部位は角と肉。角は二束三文にしかないが、肉は旨くそこそこの値段で売れるそうだ。

残念ながら翔太が二階で戦った時には、保存容器がなかったので、肉は諦めた。

ドランは家畜以上魔物以下と評価していた。

剣や盾でビッグラットの攻撃を弾く美人達。倒せるタイミングでも防御に徹していた。

「お前は運がいい。今日は魔法を見せられんと思っていたんだがな。あの様子からするとガキは魔法主体で戦うようだ」

「ドランさんは使えないんですか？それに使うとは限らないのでは？」

「俺のは肉体強化だからな。わかりにくい。不自然なくらいに前衛が防御に徹しているからな。使うさ。ほれそろそろだ」

ドランの言葉通り向こうに動きがあった。

それを見た悪趣味な服装の男は金の杖を前に掲げる。その動きに呼応するかの様に杖の先端に付けられた薄緑の石が微かに光る。

「切り裂け疾風。かまいたち鎌鼬」

風の刃が複数飛び、ビッグラットをぶつ切りにする。戦いが終わると男は一度翔太達を見て、周りの女達に話かけ、男達は翔太達いるところとは別の通路を進んでいった。

「なんでー。鎌鼬かよ。もっと派手なのを期待してたんだがな。二階でお守り付きのガキだ。こんなもんか」

男が立ち去るとドランはがっかりしたように言った。

「俺は驚きましたよ」

「あんなの初級呪文だぞ」

「あれで初級ですか」

「時間を無駄にした。とつとと帰るぞ」

ドランは言葉通りまたスタスタと歩いていく。翔太は自分が魔法を使うところを想像し、にやけながらドランの後に続いた。

お宅訪問

ダンジョンを出ると辺りはオレンジ色に染まっていた。翔太とドランはギルドへと向かう。

「疲れた」

「坊主は先にギルドにいつてこい。俺はこれを換金してくる」

「了解」

先を歩くドランは腰につけた袋を指差しどこかにいつてしまう。袋の中には今日狩った魔物が落とした者が入っている。握りこぶし大の袋には魔法がかけられており見た目に反し沢山のものが入れられるそうだ。

ダンジョンとギルドは目と鼻の先と表現できるほど近い。なんでこんなに近くにあるのかドランに聞いた所、そんなの知るかだそうだ。指導員としてどうなのかと思うところが無いわけじゃないが、今日一緒に過ごして翔太は脳筋だが信頼してよさそうだと感じていた。

悪い人じゃないんだが、スパルタ過ぎるのが問題だよな

まさかいきなりダンジョンに連れて行かれるとは思わなかった。

身体はすぐにも休めといっているが、翔太は重い足を前に進め、ギルドの扉を開く。カウンターには出て行く前とは違う人たちが忙しそうに冒険者の対応に追われていた。テストの姿が無いため、翔太は空いている椅子に座り、ドランを待つ。

「またせたな坊主」

三十分ほどするとドランが現れ、向かいの席に腰掛ける。

「いえ」

「今日の稼ぎだ」

ドランがそう言いドランが持っているのは別の袋を渡してきたのを開けてみると銀貨が五枚入っていた。

初めて自分でお金を稼いだ事に感動し、銀貨を出し袋をドランに返す。

「それはお前が持つてろ。俺からのプレゼントだ。入れるときは適当にぶち込んで。出すときは何を出したいのか頭に浮かべれば出てくる。ま、中に入ってる物が少なければ、今みたいに中を見ることが出来る」

「便利なものですね」

「冒険者には必需品だぞ」

「ありがたくいただきます」

「おう。新米に遠慮は無用だ」

ドランは笑顔で頭をがしがしと乱暴に撫でてくる。正直痛いのでやめてもらいたいが、プレゼントをもらった手前いいにくい。

誰か助けてくれと周りを見渡すが、ギルドの職員達はかすかに笑み

を浮かべこちらを見ているし、冒険者達にいたっては、こちらを気にしてすらいらない。

だが、救いの女神が現れるのが見えた。ギルドの扉をあけ入ってきた。立っているのは初めて見たが予想より身長は低いみたいだ。百六十センチよりぐらいいだろうか。ゆったりした薄ピンクのワンピースを着ているのでわかりずらいが、結構胸はあるらしい。

思考を巡らせていると、テストはまっすぐにこちらに向かってきた。急いで頭の中から今考えていたことを追い出す。

「お父さん。翔太さんおかえりなさい」

「おう。帰った」

テストが来ると、ドランはテストの為に椅子を用意する。テストが同じ席に着くと、何人かの冒険者の視線が集まった。

先程までこちらを見向きもしなかったのにな。

思わず笑いそうになるが急に笑い出すのも不自然なので翔太は必死に我慢した。

「それで、どうでしたか？父の指導は」

「刺激的でした。というか無茶すぎです」

上目使いで聞き辛そうに質問してきたテストに翔太は即答し、どんな事をしてきたかテストに説明する。最初のうちは、しょうがないなという表情で聞いていたテストだが、三階層まで言ったと話したあたりから、テストはぶんぶん擬音をつけたくなるような顔でドランを睨む。

そこからテストからドランに説教が始まるが、ドランは特に気にし

ているようには見えない。

改める気ないなこのおっさんは。それにしても、どんな顔でも可愛いな、この人は。

「でも、だいぶためになりました。ドランさんには感謝してます。手っ取り早く強くなるにはドランさんの指導は最適です」

いつまでも見ているわけにはいかないので、一応フォローしてみる。

「翔太さんがそういつてくれるのならいいですけど」

テストは納得は言っていないようだが、怒りを納める。

「がははは。さすが俺の訓練についてきた男だぜ」

「調子にのらない!」

テストの叱責にドランは笑い声で答えているがテストは諦めたのか、仕方ないなといったように肩を落とし翔太の方に視線を向ける。

「翔太さんこのあとのご予定は?」

「お世話になつて宿屋に帰ろうかと思ってます」

「坊主、今日はうちにこい。魔法についてそこまで教えてないからな。テストに教わっていい」

「テストさんは魔法使えるんですか?」

「治癒魔法と簡単な初級呪文だけですけど」

照れくさそうに話すテスト。

本当にもって帰りたいくらい可愛いな。

「私じゃ駄目ですか？」

少しの沈黙を否定と受け取ったのか、テストは捨てられた子犬のような目でこちらを見ている。

「いえ。大歓迎です」

「なら、ここに長居する理由はないな。いくぞ」

席を立ったドランに二人は続いてギルドを後にした。

テストの部屋（前書き）

勝手なお願いなのですが、魔物に詳しいサイトがあったら教えていただきたいと思います。お願いします。

テストの部屋

「片付いて無いのであんまり見ないくださいね」

「ま、ゆっくりしてけや」

薄く頬を赤く染めたテストとドランの対応は対照的だった。

「じゃあ失礼します」

二人に続いて家の中に入る。

居住区にある二人の住まいは他にも同規模な住宅が周りに建っていることが平均的なのだろう。石材で作られた家はとても頑丈そうに見えた。

またテストは片付けていないと言っていたが、とても整理されているように見える。

「じゃあ、テスト。後は頼む」

「わかりました。でわ、翔太さんはこちらへ」

テストに案内された部屋はなんと言うかいい匂いがした。

甘い匂いが充満している。

しっかりと伸ばされたシーツの敷かれたベットに、収納付きの机、白いソファ―。窓際には植木鉢に植えられたピンクの花。簡素な部屋に見えるがベッドに置かれた複数のぬいぐるみが女の子らしさを演出しているが、部屋の隅には大きな本棚があり、一番目を引いた。

「えへへ。なんか恥ずかしいです。男の人を部屋に入れたのは初め

てなんです」

うん。なんだろう。この人はいろいろと反則だね。

心拍数が順調に上がっていったるのがわかる。教えを請いに来たとはいえ、綺麗な女性の部屋にいきなり通され、翔太のキャパシティ的にいっぱいだった。

女性経験の乏しいというか、一切無い翔太は動揺を表に出さないように努力した。

「でわ、そこに腰掛けてください」

「わかりました」

言われたとおりに腰掛けるとテストは当然のように翔太の隣に座った。

近いですテストさん。

「でわ、魔法について簡単に説明しますね」

「はい。お願いします」

「魔法とは呪文によって起こしたい現象を世界に伝え、術名によって世界の理を改変する事です」

「はー」

「改変できる大きさは個人の技量によって異なります。実際にお見せしましょう」

にこりと笑うとテストは右手の手のひらを上に向ける。

「暗闇に生きるものに光を。ライト」

「おー」

テストの手には優しい光を放つ球体が浮かんでいる。テストが手を軽く振ると光の玉は宙に浮く。

「今は魔力の量を調節したので弱い光です。さらに魔法によってはある程度コントロールできる物もあります」

そっぴいながらテストは視線を動かす。すると光の玉もテストの視線を辿る様に動く。

「でわ、やってみてください。とりあえず魔力のこめ方などは一度使って見ないとわからないと思いますのでやってみてください」

「わかりました。暗闇に生きるものに光を。ライト」

呪文を唱えてみるが、なにも起こらない。

「あれ？おかしいですね。手に魔力が集まったあと拡散しちゃいました。無系統呪文がつかえないなんておかしいですね」

うーんと可愛らしく首をかしげるテスト。

翔太も魔法が使えると思っていたので若干だが消沈する。

「失礼ですけど、ステータスカードを拝見してもいいですか？」

「はい。ステータス」

ステータスカードをだしテストに渡す。

「うーん」

テストはさらに考え込むような顔になる。

「どうかしました？」

「いえ。魔力はあるようなのですが、その記載がないんですよ」

「え？ちよつといいですか」

テストからカードを返してもらい確認するがスキル、ギフトの中にちゃんと記載されていた。

「ここにかいてありますよ」

テストにカードを見せるが、不思議そうな顔をしている。

「えつと、どこですか？」

どうやらテストにはギフトの記載が見えていないようだった。

「レベルが上がれば呪文が頭に浮かぶこともあるそうなので、大丈夫ですよ」

「精進します」

「応援しますけど、無理はしないでくださいね」

テストはそういうと、翔太の袖を引っ張った。

禁止令

「あつ、ごめんなさい」

「いえ。大丈夫です」

テストは耳をピクピク動かしながら、翔太の袖から手を離し、ベッドに潜った。

どうすりゃいいんだよ。

突然のテストの奇行。

布団の中でもぞもぞと動き、時折何か言っている様子で小さな声が聞こえる。

「うー」

「大丈夫？」

うなり声が聞こえたので、翔太は声をかける。すると、テストがベッドから起き上がる。

ポニーテールにされていた髪は下ろされており、少しボサボサになっていた。先程より幼く見える。

「自分の行動を抑えるのに必死ですけど、大丈夫です。そういえば、翔太さんはお一人みたいですけど、どうするんですか？」

「どうするって？」

質問の意図が分からず翔太はテストに質問で返す。

「一人でダンジョンやギルドの依頼を受けるんですか？」

「ああ。そのつもりですよ」

「駄目です」

すごい笑顔で止められたよ。

「何ですか？」

「一人だと何かあった時に対処が難しいからです。なのでギルドの依頼にしましては勝手ながら受けられないように手続きいたします」

「困ります。主に金銭面で」

「お金より翔太さんの命が大事です」

なんか頑ななんですけど。

「でも」

「反論は認めません」

「わかりました」

翔太はとりあえず頷いておく。形だけでも納得した風を装っておく事にした。それに何か威圧感みたいな不思議な迫力を感じる。

「わかってもらえたなら良いんです。本当なら私が付いて行きたい所ですが、さすがにギルドのお仕事がありますし、お休みの日は付き合いますね」

可愛らしく腕を曲げるテスト。力こぶを作るしぐさにも見えるが、女性らしく細く柔らかそうな腕だった。力こぶなど見当たらない。

「戦えるんですか？」

「それでも魔法は得意なんです」

力こぶ関係なかった。

「その時はよろしくお願いします」

「はい。お願いされました」

ニコリと笑うテストからは先程感じた迫力は消えていた。

「今日はいろいろありがとうございました。お世話になっている人に何も言っていないので、今日は失礼します」

「はい。わかりました。また是非来てくださいね。四日後なら付き合い出来ますので、それまでは大人しくしててくださいね」

迫力が戻ってきた為、翔太は逃げるようにテストの部屋を後にした。部屋を出ると、そこにはドランの姿があったどうやら様子を伺っていたようだ。

見た目に反し、親バ力なのか。

「帰るのか？」

わざとらしいドラン問いに、思わず苦笑してしまふ。

「はい。今日はありがとうございました」

礼をいいドランに背を向けて歩き出そうとすると、肩を掴まれた。

「なら一つだけ言うておく」

「なんですか？」

「テストを悲しませるな」

真面目な顔で話すドランに頷いて見せ、翔太は帰路についた。

予期せぬ再会

「遅かったわね」

翔太が部屋に戻るとベッドの上には寝転ぶ女の姿があった。正確にいうと翔太が借りている部屋でくつろぐ改造巫女服の自称神の女だ。翔太を異世界に放り込んだところを見ると本当の神かも知れないが。

「なんでここに？」

「いや、ほら、急にこっちつれてきたじゃない？さすがに手ぶらでこっちに連れてきたのは悪かったかなって思ってた様子見にきたのよ」

「なんとかやってるよ。ここに連れてきてくれてありがとうな」

翔太は椅子に腰掛け改造巫女服の女を見る。

女は寝転がっていた身体を起こしベッドに座る。

「いいのよ。楽しめてる？」

「たぶんな」

「そ。はいこれ餞別」

そう言うのと懷に手をつっ込んだ。

思わずその仕種にどきどきしてしまう。

「餞別？」

「そ。この世界のお金。なんかいろいろスキルはあるみたいだしね」
話しながらも何かを探すように懷を漁っている。次第に着崩れしていくが女は気にしていないようだ。

翔太には女の白い肌が光を放っているかのように輝いて見えた。

「あ、あつた。はいこれ」

女の差し出した手の中には翔太の持っている銀貨とはデザインが異なる銀貨が一枚。受け取ってみると翔太の持っている銀貨より重い。

「ども」

「んじゃ、私行くわね」

女の姿が次第に薄れていき、その姿は消えた。

「いまさら銀貨もらってもな」

正直、銀貨五枚を稼いだ後に銀貨一枚もらってもなんら嬉しくない
と思いながらももらったベッドに寝転び銀貨を眺める。ユニコーンと
思わしき絵が彫られているが、色は銀貨とほとんど変わらない。
しばらく眺めていると、次第にまぶたが重くなっていく。

「今日も濃い一日だったもんな」

思考がぼんやりとしていく。

コンッコンッ

軽いノックの音がし、ドアノブを回しフローラが部屋に入ってくるが、翔太はそれに気づかず、まどろんでいる。

「おにいちゃん。寝てるの？起きてー」

「ん。フローラか」

「うん。お母さんが帰ってきてるなら、ご飯できてるから食べに来てだつて」

「了解」

地球で寝ていたベッドより寝心地が良い為、布団の上にいると激しい睡魔がまた襲ってくる
そのため眠いと訴える頭を振り無理やり覚醒させて翔太はベッドから起き上がる。

「な、フローラこれって普通の銀貨だよな？」

先程女が置いていった銀貨をフローラに渡す。

「なにか描いてある絵が違うね。でも私には銀貨にしか見えないよ。お母さんにならわかるかも」

「だよな。ただの銀貨にしかみえないよな。ルアンさんに聞いてみてただの銀貨だったら、フローラにあげるよ」

「うん」

嬉しそうに笑うフローラの頭を撫でる。

「じゃあ、さっそくいくか」

「はい」

翔太とフローラは部屋をでてルアンの待つキッチンへと歩いていった。

その手にあるものが翔太の生活を変えることになるものとは知らずに。

価値（前書き）

読みにくいところございましたら報告お願いします。

価値

食堂に近づくにつれ香ばしく焼けた魚の香りが鼻を刺激する。

「戻りました」

「はい。おかえりなさい。ギルドはどうでした？」

「ドランさんに指導していただいたのですが、なんていうか、ハチヤメチャでした」

「あらあら、テストさんは可愛いですもんね。フローラも大変だわ」

ドランさんに指導受けたっていっただけで、テストさんの可愛さに惹かれて招いた結果だとばれている様だ。どんだけ聡いんだよルアンさん。

「なにが大変なの？」

「うふふ、なんでしょうね。何かわかります？翔太さん」

「勘弁してください」

「さ、冗談はこのくらいにして二人ともお座りなさいな。せっかくの食事が冷めてしまうわ」

「はい」

「うん」

ルアンに促され、翔太とフローラは席に着いた。

「いただきます」

フローラとともに、いただきますと手を合わせてから翔太の箸はサラダばかりに伸びていた。メインと思われる赤い魚を食べることにためらいがある。

その赤い魚は恐ろしい顔をしていた。

角が生え、夜に見たら泣く者があとをたたなそうな面構えだ。隣に座ったフローラはおいしそうにパクパクと食べ進めている。

食欲を誘う香ばしい匂いに胃が早く食べて見ろよと訴える。

意を決して一口食べてみると、脂がのっけていてとてもおいしい。見た目を気にしちゃ駄目なんだなと学びました。

「おにいちちゃんさっきの聞かないの？」

「なにか聞きたい事があるのかしら？」

「これなんです、銀貨のようなんですが見た目が違うようなのでフローラにきいてみたんですよ」

ポケットに突っ込んでいたそれをルアンに差し出すとルアンは目を見開いた。

「これ、銀貨じゃないわよ。白金貨よ」

「白金貨？」

「ええ」

心なしか引かれている気がする。

「金貨百枚の価値があるわ。必要ないと思って説明してなかったんだけど、こんな大金どうしたの？まさか犯罪に手を染めたんじゃない？」

「そんな事しません！というか、ドランさんに連れまわされていたのでそんな暇ありませんでしたよ。知り合いにもらったんですよ」

「こんな大金を持つてる知り合いがいるのね……。盗んでないのならいいけど」

どうやら犯罪に手を染めたと思われるらしい。

それにも、金貨百枚の価値があるといわれてもいまいちピンとこない。

「何が変わえますかね？」

「この街の小さな家なら買えるわよ」

大金ですね。

「今、一人でダンジョンに行くのとギルドの依頼を受けるのをテストさんに禁止されているんですが、奴隷とか買えますか？」

「元犯罪者の奴隷なら5人は買えるわね。確かに一人で行動するのは進めないわ。旦那みたいなことになったら大変ですものね」

「そうですか。明日にでも見に行つて見ます」

「そうなさいな。お金は大事に使わないと駄目よ?」

笑顔を浮かべていることが多いルアンだが、今は、母の顔をしている。

ルアンにとってはフローラも翔太も変わらないのかもしれない。

「はい」

「よかったね。お母さん知ってて」

「ああ。話ふってくれてありがとうな。魚の事考えてたら、すっかり頭から抜けてたよ」

「お魚がどうかしたの?」

「結構強烈な顔してるじゃんか。食べるかどうか悩んでたんだ」

「ふふ。バロツシュを食べるのが初めてだなんて変わってますね」

白金貨の話は終わり、食卓に上がった魚の話に変わる。

ルアンの口ぶりからすると、この魚バロツシュはメジャーな食材のようだ。

肝試しの主役にはしか見えないが味は確かにおいしい。

「こっちの世界に来てまだ日が浅いですからね」

「こっちの世界?」

「いや、いい間違えた。こっちの地方だよ。山奥に住んでたからさ。川魚しか食べてなかったんだ」

「これは川魚ですよ？」

どうやら墓穴を掘ったらしい。そういえば海が近いなんて情報は今のところ入ってきていない。

フローラとルアンの視線が痛い。

「今日はドランさんに連れまわされて疲れてしまったので、もう休みますね。夕食おいしかったです。ご馳走様でした」

翔太は逃げるようにその場を後にする。

二人は翔太の様子に違和感を覚えていた。

「お母さん。お兄ちゃんにか変だったよね？大丈夫かな」

翔太の行動を見て、説明できない不安襲われたフローラはルアンの横の席に移動し、抱きつく。

「いつかちゃんと話してくれるわよ。私たちからは聞かないでおきましょう。何かどうしても話せない理由があるのよ」

「うん」

寂しそうな表情のフローラの頭をルアンは優しい手つきで撫でる。

「どんな話が楽しみにまっていますよ」

「どんなことでも、お兄ちゃんの事なら頑張って受け入れるよ」

「翔太さんが大好きなのね」

照れくさくなつたのかフローラの顔が朱に染まっていく。

本当に可愛いんだから。

ルアンはそう思いながら、フローラの頭を撫で続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8233z/>

異世界日記（仮）

2012年1月9日22時45分発行